

2) アジアにおけるナショナリズムの台頭と「黄禍論」

① アジアにおけるナショナリズムの台頭

日露戦争

中国

1905 中国同盟会結成 三民主義（民族主義・民權主義・民生主義）

インド

国民會議派

1905 ベンガル分割法

1905 イラン立憲革命

1908 青年トルコ革命

最終ゴール：ヨーロッパのような国家建設；国民国家体制のアジア世界への拡大

cf. ガンディーの思想

② 黄禍論

ヴィルヘルム2世の黄禍論

ニコライ2世宛の手紙

「ぼくは君が日本に対抗してヨーロッパの利益を守るために、ヨーロッパが連合して行動をとるようイニシアティヴを取った、その見事なやり方に対して心から感謝している」（1895年4月26日）

「こうした行動が「アジアの教化ならびに十字架と古来のキリスト教的ヨーロッパ文化との擁護」に他ならない。」（1895年7月10日）

「黄禍の図」について

「ヨーロッパの諸列強が一致して、仏教や異教や野蛮の侵入に抵抗し、十字架の擁護に立ち上がる」（1895年9月25日）

黄禍論を支えたもの

ヴィルヘルム2世の政治的意図

アメリカにおける黄禍論

中国人、日本人の排斥運動

1848- カリフォルニア・ゴールドラッシュ

1850年代 大陸横断鉄道建設

→中国人苦力 大量導入；反苦力運動の展開

1882 連邦議会 中国人移民禁止法

その後日系移民が増加; 20c- 排日運動展開

1924 移民法（「排日移民法」）

正当化の論理

「帰化不能外国人」+多産 → アメリカ乗っ取り

日露戦争の復員兵の大量移民

イギリスにおける侵略戦争の流行

① ドイツと推定される国による侵略

イギリスとドイツの対立 ex 建艦競争

フランス ex 1882-83 「海峡トンネルパニック」

② 得体の知れない怪物による侵略

プラム・ストーカー『ドラキュラ』1897年

黄禍論的に読める

H・G・ウェルズ『宇宙戦争』1898年

火星人が突然イギリス襲来、おそるべき威力を持つ熱戦で破壊

イギリス人の支配によるタスマニアのアボリジニの絶滅に着想を得る

（自分たちがタスマニア人の立場になりうる恐怖）

「われわれは、彼ら（火星人）についてあまりに過酷な判断を下す前に、われわれの種族（人類）が、今では死滅してしまったバイソンやドードーといった動物ばかりでなく、人類の下等な種族に対しても、いかに無慈悲で徹底的な破壊行為を行ったかを思い出さなければならない。タスマニア人は、その人間的相似性にもかかわらず、ヨーロッパ人移民が企てた絶滅戦争によって、50年のうちに完全にその存在を抹殺された。火星人がそれと同じ精神で戦争を仕掛けてきたとしても、それに文句が言えるほどわれわれは慈悲心の使徒であろうか」

「文化的罪悪感」「反転した植民地化の不安」（アレータ）

4) 社会帝国主義

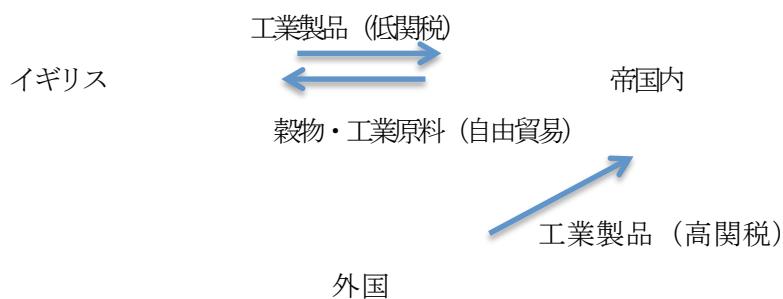
社会政策と帝国主義政策によって労働者階級の支持を獲得し国家統合

背景 大不況 労働運動、社会主義運動の高揚

イギリスの社会帝国主義

南アフリカへスラム街の子供達を移民させる計画

ジョセフ・チェンバレン 「帝国内特惠関税制度」



丹治愛『ドラキュラの世紀末 ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』東京大学出版会

1997年

長崎暢子『ガンディー 反近代の実験』岩波書店、1996年